研究プロジェクト

物への依存・人への依存――移行対象研究からの検討

黒川嘉子（佛教大学准教授）

■移行対象

社会的きずなが弱まっていると言われる現代社会において、それなしではやっていけないという依存の問題は、どのようなこころのあり方を示しているのだろうか。本研究では、Winnicottが移行対象（transitional object）という概念で示した、乳幼児が特定の物に強い愛着を示し、就眠時や外出時に肌身離さず持とうとする行動に着目し、物への依存・人への依存の原初的な問題について検討することを目的としている。

乳児にとっての養育者など、人は人生最早期から特定の人とのあいだで、頼りになる関係を築くことなしに健康的に成長することはできない。また、子どもに限らず大人でも、何かこころの支えとなるような人や物があることによって、精神的な安定を保つことができる。ただし、依存の問題を考えるとき、過度の依存やaddictionのように、特別な対象と関係を築くことは、同時に、そこから離れることができるか、適切な距離が取れるかという近づく方向と離れる方向の両極の動きが生じることに注目する必要がある。単に程度の違いということではなく、頼りになる対象に依存するこころのあり方は、実は非常に複雑なものと考えられる。

■ぬいぐるみに強い愛着を示した子どもの例

そこで、愛着を向けた対象から自然と離れるプロセスを、あるクマのぬいぐるみに強い愛着を示した子どもの例を通して考察をおこなった。１歳後半から２歳にかけて、あるクマのぬいぐるみが特別な存在となる（**図１**）。「くましゃん」と呼び、就眠時も、「くましゃん」相手に、その日の出来事を話したり、「くましゃん」のセリフを母親に言わしながら、「くましゃん」との会話を存分に楽しんでから眠ることが毎晩続いていた。ところが２歳後半になると、「くましゃん」の存在感は薄れ、あるとき「あのクマ、お名前なんやった？」と愛着を込めて呼んでいた名前さえも忘れ、その子どもにとって特別な意味は失われていった。

■不確かさの体験

Winnicott（1953）は、子どもたちは移行対象に「おぼれるほど夢中になる」が、「移行対象は、徐々に心的エネルギーの備給が撤去され、意味を失う」。なぜなら「中間領域全体へと広がっていくから」と述べている。上記の例でも、２歳後半には言葉も発達し、遊びの世界も格段に広がっていた。中間領域での体験は、内的主観的現実と外的客観的現実の双方に貢献しており、Winnicott（1971/1979）は、遊ぶことの体験であり、その特質として「不確かさ（precariousness/あてにならなさ）」と言及している。これまでの移行対象研究では、同じ肌触りやいつもの匂いを強く求める子どもの様子や、就眠時行動でもお決まりの儀式をすることが大事であることなどから、それらの同一性、連続性、変わらなさという確かさが重視されてきた。しかし、子どもは、移行対象をもつことによって、一定の秩序や安定の中でこそ味わえる不確かさを体験していることが重要ではないだろうか。

■自閉対象との比較研究

今後、自閉症児が執着、固執するものとしてTustin（1980）が示した自閉対象（autistic object）と比較研究していくことで、“不確かさ”を体験することについて、さらには、その基盤となる人との関係のあり方について検討していけるものと考えている。